OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞公宴続歌研究会編 ： 『公宴続歌　本文編 索引編』
Author(s)	海野, 圭介
Citation	語文. 2001, 77, p. 50-51
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68991
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

紹　介

公宴続歌研究会（井上宗雄監修　三村晃功代表）編
『公宴続歌　本文編　索引編』

海野圭介

天皇を中心とする公の行事は、消長を繰り返しつつ定例・臨時共に幾種類も挙行された。御会始をはじめとした宮中歌会もその一つであり、筵に列する廷臣達は、断絶することなく陸続と和歌を紡ぎだしていった。中世和歌の中核をなすとも言える歌会和歌は、稀に懐紙・短冊の姿で時を経て伝来することもある（伊井春樹氏「永正八年七月二十五日御会和歌懐紙について」（詞林17　平7・4）等）が、多くは御会集と通称される類従によってその実態を窺うこととなる。

井上宗雄氏監修、三村晃功氏代表のもと翻刻紹介された『公宴続歌』は、宮内庁書陵部蔵、二十九冊、第一冊冒頭「永享十一年（1439）禁裏御会」から、第二十九冊末尾「元和四年（1618）聖廟御法楽和歌」に至る、凡そ百八十年に亘る四百六十余度の歌会和歌、総数二万八千余首を収載する。その資料的価値は多大であり、監修者である井上宗雄氏が本書序文に示される如く、詠草資料の詠作年時同定のための基礎台帳、歌題研究の資料、公宴に列した廷臣の伝記史料、同時代歌壇史々料等々、多岐に亘る利用が想定され、また、近年注目を集めている御会自体を対象に据えた制度面における検討（小川剛生氏「南北朝期の和歌御会始について」（和歌文学研究78　平11・6）等）においても、基幹資料として必須である。正に「室町期和歌の研究に当たってまず座右に置くべき一大資料集成」（井上氏序文）と言える。

収載される歌会の内訳を見ると、後柏原院期（文亀二年1502から大永六年1526迄を所収）が総歌数の凡そ八割を占め、同期の歌壇史料としての利用価値の高いが、遡って、後花園院期（永享十一年1429から寛正四年1463迄を所収）、後土御門院期（文明九年1477から明応七年1498迄を所収）の詠作も、それぞれ総歌数の約一割にあたる三千首余が収められており、詠作者の構成、和歌の詠みぶり、制度・次第の変遷等の種々の面から史的展開を辿ることが可能である。また、索引編には、こうした探求に柔軟に対応できるよう、和歌の全句索引、漢詩の一字索引、歌題・作者の索引が完備されている。

一首一首を通覧してゆくと、豊饒な室町和歌の世界に圧倒されると共に、歌題や詠作者の構成等に幾分奇異な印象を受ける箇所も見受けられる。そうした不審部分については、既に、分担担当者である伊藤敬氏により『公宴続歌』の原本自体に錯簡等の想定される箇所があるとの指摘がなされており、注意すべき諸点が示されている（伊藤敬氏「『公宴続歌』の読み方―十五世紀～十六世紀宮廷和歌史稿―」（平成十三年五月和歌文学会例会・口頭発表））。本書では、近年の通例に倣い私意による補訂は施されず、原本に忠実な翻刻がなされるが、利用の際には聊か留意が必要であろう（伊藤氏による報告が成稿化された際には、本書利用のためには必読である）。

なお、『公宴続歌』以降の御会については、内閣文庫蔵『近代御会和歌集』二十三巻三十冊（元和十年1624―元禄八年1695）、同二十五巻二十五冊（元和十年1624―貞享四年）、東京大学史料編纂所蔵『近代御会歌林』二十七巻三十冊（慶長十年1605―元禄五年）等の大部な御会集があり活字化が俟たれるが、こうした御会資料への関心を広く喚起

する意味でも本書刊行の意義は大きいと言える。末尾ながら、察して余りある労を払われた偉業に敬意を表したい。

（和泉書院、二〇〇〇年二月刊、一七三六頁、四〇、〇〇〇円）

――日本学術振興会特別研究員――